

秋暑し暑しと心鎮めけり

稲畑汀子

暦の上では秋になり、二十四節気の一つ処暑も過ぎましたが、8月後半は厳しい暑さが続きました。学校では「今日も暑いですね」の言葉が挨拶代わりに交わされる毎日でした。今年の夏は7月が涼しかっただけに、一転して迎えた8月の厳しい暑さは、身体に堪えました。暑さも一段落した感がありますが、涼しくなるのは、まだまだ先になりそうです。当分は感染症対策に加えて熱中症対策も講じなければならないようです。そんな中でも朝の風や夜の虫の声に、秋の気配を感じる今日この頃です。



2学期がスタートしました

8月21日から2学期がスタートしました。始業式は放送により行いました。私の講話では、18日に行われた第66回福島県高等学校体育大会代替大会の陸上競技女子5000メートル競歩で第1位となった荒ひかるさんの活躍について紹介しました。荒さんは効果的な練習とはどのようなものかをじっくり考え、それを積み重ねることで基礎体力の増強と技術の向上を図りました。「量より質」を重視した練習が実を結び、優勝につながったと言えるでしょう。そのことは学習にも相通じる点があることにも触れました。次に3年生諸君には、いよいよ進路決定に向けた取り組みが本格的に始まることから、進学にせよ、就職にせよ、受験本番までの限られた時間を意識し、取り組むべき事柄を整理して、計画的に実行するよう伝えました。また1・2年生諸君には、学習や部活動など様々な活動に積極的に取り組むこと、学習と部活動のバランスを取ることを伝えました。結びには、新型コロナウイルス感染拡大が収まらないことから、あらためて基本的な感染症対策を確認し、「新しい生活様式」を実践すること、「with コロナ」の時代は感染を防ごうとする強い気持ちが求められることを話しました。生徒達にとって有意義な2学期になることを心より願っています。



おすすめ書籍



村上春樹著『雨天炎天』（新潮文庫）

コロナ禍で旅行が思うように出来ない今、紀行文を読んで旅の疑似体験をして、漂泊の渴望を満たすしかないと思っています。お盆休みに私が読んだ紀行文が村上春樹の『雨天炎天』でした。30年も前に著者がギリシャとトルコを旅した時の紀行文ですが、引き込まれるようにして読みました。特にギリシャの聖地アトス半島を巡る旅は、俗世から隔絶した修道院の実態を描写しており、興味深い内容でした。「濃密な確信に満ちた」アトスに心引かれるのは、著者だけではないでしょう。おかげで私は、退職後に計画している四国八十八ヶ所遍路の旅とスペインのサンチアゴ巡礼を必ず実現しようと、決意を新たにしました。

75年前の夏を振り返る ～終戦前後の旧制相馬中学校について～

今年の8月15日は75回目の終戦記念日でした。1945（昭和20）年のこの日の正午、ポツダム宣言を受諾し連合国に無条件降伏したことを告げる昭和天皇の玉音放送が流れました。日本が敗戦に至った経緯については、関連図書で詳らかにされており、私はこの日を、当時の指導者が国策を誤って戦争を遂行し、自国民や近隣諸国の人々に塗炭の苦しみを与えた歴史を振り返る機会としています。

ところで、75年前の終戦前後の相馬中学校の様子はどのようなものだったのか？昭和二十年度「教務日誌」から主な出来事を切り取ってみます。すでに前年から学徒勤労動員が始まっており、3年生から5年生までの多くが福島・京浜方面に出動し、多くの教員も動員付添で出張し不在でした。そのような中、通年勤労動員「最大の悲劇」が起きます。それは6月10日朝、横浜市金沢区にある海軍航空技術廠支廠に動員された4年生2名が空襲に遭い亡くなるという事件です。翌日の「日誌」には次のように記されています。

「第四学年甲組菊地了、南原文雄両君、昨十日ノ空襲ニ依リ殉職散華ス。朝礼ニ於テ同哀悼ノ黙禱ヲ捧グ。」

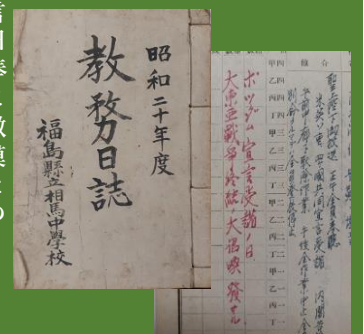
『相中相高八十年史』には、「相中生徒被爆の日」のタイトルで引率した岩崎敏夫先生の日記が転載されており、読むたびに痛ましさで心が震えます。

終戦間近の8月に入ると、学校の緊迫した様子を伺うことができます。9日早朝、敵小型機が来襲し、中村町附近に被害があり、10日、県当局の通達により全生徒の登校が停止されます。この日も午前6時に空襲警報が発令され、午後2時解除されましたが、松川、鹿島方面で被害が出ています。11日、正門前に「明日日登校休止十三日警報ナキ場合登校セヨ」の掲示がなされ、また、御真影並びに勅語の山上国民学校への奉遷が行われました。13日から14日は、中村町在住の生徒が登校し、廊下の取り壊し作業が行われました。そして15日、午前中に廊下の取り壊し作業が行われていましたが、

正午、全員で天皇の玉音放送を聴き、敗戦を知ることになりました。校長からは「我等ハ今マデ死シテ皇國護持ニ戦ヘルモ、今後ハ生キテ國体ヲ護リ抜クベシ。尚又爾後ノ苦難ニ堪エヨ」の訓示があり、午後の作業を中止して、全員が下校となりました。日誌の余白には朱書きで次のように記されています。

「ポツダム宣言受諾ノ日、大東亜戦争終結ノ大詔喚発サル。」

その後、21日から生徒は居住地区ごとに交代で登校し、連日、校舎周辺の整理作業等に従事しました。24日には山上国民学校に避難していた御真影並びに教育勅語が戻り、9月1日には始業式が行われ、3日より普通授業が始まりました。また、9月30日に3年生は磯部、2年生は釣師浜、1年生は原釜に遠足に出かけ、10月16日には全校遠足も行われました。11月29・30日の放課後には、生徒と教員による野球の試合が行われ、職員チームが大勝しています。戦後の教育制度がどうなるのか明らかでないこの時期に、早くも授業を再開し、学校行事が行われ、放課後に野球を楽しんでいたことは、驚きに値します。しかし、動員先から戻った生徒達の学校への不信や学習意欲の低下は深刻であったと言われています。年が明けて1月26日には御真影の奉還、3月11日には奉安庫の撤去作業が完了しました。こうして学校から軍国主義教育の象徴が姿を消し、その後、民主教育を模索する混乱を経て、新制高等学校として再スタートを切ることになります。



## ブリティッシュヒルズ英語研修が行われました

8月4日から6日まで、イノベーション・コースト構想を担う人材育成事業の一環として、ブリティッシュヒルズ英語研修が行われました。1・2年生から選抜された受講者30名は、2泊3日の研修において英語力の向上に努めてきました。1日目はチェックイン後に英語で質問する練習、生活に役立つフレーズや単語を学ぶレッスンが行われました。2日目は聴き取りを基本として発音に特化したレッスンや、相手の伝えたいことを理解するために、キーワードを意識して話を聴くことを学ぶレッスンが行われました。また、グループプレゼンテーション能力や、英語でパブリックスピーチを行う場合のスキル向上を目指すレッスンが行われ、最終日に行われ

る発表会の準備をしました。3日目はグループごとに発表会が行われ、1年生はエネルギー問題や環境問題から幅広い社会問題について、2年生は地元市町村の魅力、復興の現状、地域発展の方策についてプレゼンテーションを行いました。生徒諸君はこれからの時代に求められる英語によるコミュニケーション力と表現力を身につけることの大切さを学びました。



## 吹奏楽部第21回定期演奏会が行われました

8月16日、相馬市民会館大ホールにおいて、本校吹奏楽部の第21回定期演奏会が行われました。大型連休中に予定していた定期演奏会は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い延期となっていました。この日ようやく開催の運びとなりました。当日は、入場制限、座席指定、検温、換気、消毒等の感染防止策を講じました。第1ステージはクラシックを中心に、第2ステージはアンサンブルを中心に、第3ステージはポップスを中心に演奏が行われ、生徒達は「聴いてくださる方全員に感動していただく演奏」を目指して、心を込めた演奏と趣向を凝らしたステージを届けました。部長の菅野聖玲菜さ

んの挨拶では、コロナ禍で先が見通せない不安の中で精一杯準備し、悔いのない演奏ができたことが伝えられました。また、1・2年生の代表生徒からは、引退する3年生一人一人に対して、感謝の言葉が伝えられました。音楽の魅力を再認識するとともに、生徒達の成長した姿に感動した演奏会でした。



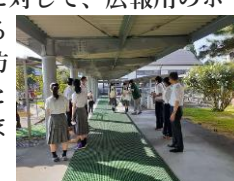
## 熊本県南豪雨災害義援金を送金

7月31日、学校を代表して生徒会長の田中暖々さん、会計局長の西内悠太君の2名が、熊本県南豪雨災害義援金34,590円を熊本県が開設した受け入れ口座に送金しました。日本列島に停滞した梅雨前線の影響により、熊本県南部は7月4日未明から朝にかけて大雨に襲われました。河川が氾濫し、各地で市街地が水没するなど、甚大な被害が出ました。被災された方々には、心よりお見舞い申し上げます。生徒達は少しでも被災地の方々のお役に立ちたいという気持ちから募金活動を行いました。



## 少年警察ボランティアに協力

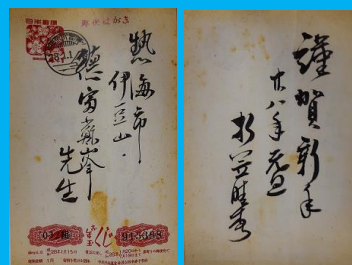
8月26日、交通安全委員会の生徒諸君は、相馬警察署による少年の犯罪被害防止及び自転車盗難被害防止を目的とした広報活動に、少年警察ボランティアとして参加しました。昇降口において、相馬警察署の方々とともに、登校する生徒に対して、広報用のポケットティッシュやリーフレットを配布するとともに、犯罪被害防止や自転車盗難被害防止を呼びかけました。今後も引き続き学校として、少年健全育成活動に協力してまいります。



## 同窓生列伝①⑥ 折笠晴秀 (1885-1965) 続編 ～折笠と徳富蘇峰～

今回は折笠と徳富蘇峰の交流についてみていきます。徳富蘇峰は明治から昭和戦後期に活躍した著名なジャーナリストです。日本最初の総合雑誌「国民之友」や「国民新聞」を発刊し、言論界をリードしました。その活動は幅広く、思想家であり、評論家であり、歴史家でもあり、昭和13(1938)年には、蘇峰会相馬支部の発会式が本校講堂で行われた時は、夫妻で来相しています。折笠と蘇峰の交流については、若干の資料が残っており、戦後、折笠が晩年の蘇峰を診察したことを示唆しています。その資料とは、折笠が蘇峰宛に出した葉書類です。現在、神奈川県二宮町にある徳富蘇峰記念館に保管されています。それによると、昭和28年から昭和32年までの5年間、折笠は熱海市伊豆山に居を構えていた蘇峰に年賀状を出しています。宛先は熱海市伊豆山押出119となっており、蘇峰は昭和18年から熱海伊豆山に居を構え、住居を晩晴草堂と名付けました。昭和30年の年賀状の余白には、「何かご用がありましたら、御下命願います」と手書きされています。医師に対するご用とは、治療行為や薬の処方他に他なりませんので、おそらく折笠は蘇峰を診察したことがあったと判断しても許されるでしょう。また、葉書類には折笠の住所が記されており、その動向を知ることができます。昭和30年の残暑見舞いの葉書を見ると、湯河原町の病院のほかに、火曜日午後2時から水曜日午前中まで東京港区にある診療所に勤務してい

ることが記されています。昭和32年の年賀状は、婿養子の蕃男と連名で出されており、蕃男が静岡県吉原病院内科医長を辞し、自宅で診療を始めたので何分よろしくお願ひしたい旨の追記があります。自分の後継者を関係者に周知し、引き立てようとする折笠の意図が読み取れます。二人の交流は、蘇峰が亡くなる昭和32年11月2日まで続きますが、同年11月13日付けの徳富家宛の手紙があり、また、昭和36年3月、折笠は蘇峰の秘書であった塩崎彦一宛に転居の挨拶状を出していることから、引き続き蘇峰の家族や秘書との交流が続いたと思われます。ちなみに秘書の塩崎宛の葉書には、次のようにあります。謹啓 益々御健勝慶賀の至りに存じます。私事昨十月末から藤沢市鶴沼六八一〇に仮り住居をして居りましたが新築が出来ましたので左記へ又引越しました。今後共宜しく御願ひ致します。この葉書には鶴沼に新築した医院の住所と診療科目が印字され、余白には「近くへ来ました。よろしくお願ひします」と手書きの文章が記されています。以上、徳富蘇峰宛の葉書類からは、診察した患者を大切に折笠の一面が伺われます。



昭和28年に折笠が蘇峰宛に出した年賀状